



橋本 直人(4年)

三輪 正博(5年)

末永 愛(6年)

ふるさとへ

24

児玉 守右さん

(神奈川県在住)



「おれの田舎」

昭和三十一年大津高校を卒業し、不安と夢と希望の入り混った気持で、「おれの田舎」をあとにしたのは、つい先日のような気がする。

東京での学生生活、マニラの海外駐在、三男誕生、帰国、貿易会社設立、そして今日までの四十数年間、ニューヨークの街角で、雄大なグランドキャニオンで、カナダナイヤガラ大瀑布で、タイ国アユタヤ遺蹟で、そして自然の奥深いアラスカでフィッシングをした時、不思議と日置の山、川、海、両親兄弟、友人達の事を思い浮かべる。私はこんな遠くまで来ているのか...と思う時、現在住んでいる東京ではなく、常に古市からの距離が基準となり、「おれの田舎」を思うのである。

黄波戸の防波堤での釣り、千畳敷で友人と寝ころんで大空に向って大声で歌った事、二位の浜で沢山サザエ、タコを捕った重さが肩ににくい込み血をにじませ夕間にせまる山道を帰った事、人丸様のお祭り、夜道の峠で猪親子に出会って驚ろいた事等、記憶は次から次へと限りなく、泉の如く絶える事なく思い出される。世界のどれ程素晴らしい景色でも、日置の私の育った思いつく出多い景色には、とうてい勝るまい。

私にとって、「おれの田舎」は世界一。何かにつけて「おれの田舎」と話し始める私は度々同じ話を聞かされる友人に、笑われている。

私も今年は、五十九才。世の為、人の為に、役立たなく

日置俳壇

〈兼題 若 布〉

- わかめは 若布干す路地いっばいに縄を張る 富田佳津美
  - わかめは 若布干す浜にも本家分家あり 河内みさほ
  - あまの髪より黒き若布買 吉村一泉女
  - 石見より 必ず届く板若布 河内みさほ
  - 若布干し裏戸開ければ匂ひく 西村亥子代
  - 新若布なますで 一家食進み 高尾 凡果
  - 乾きつつ 若布薄日に香を放つ 富田佳津美
  - さみどりの 刺身のつまの新若布 白石 敏江
- 
- 父の忌日背戸に手植えの水仙花 吉村一泉女
  - 罹災地に孫結ばれて春近し 福山スミエ
  - 出初式加賀鳶高く宙に舞う 柚花
  - 海苔かき女荒波かわす感応かな 高尾 凡果
  - 無人駅降りて帰省の山笑う 塩瀬 米江
  - 浦人の方言ぬくし春隣 西村亥子代
  - 春またで他郷に逝きし友悼む 国司ハル子
  - はげましの電話掛け合い日脚伸ぶ 白石 敏江

筆者紹介

昭和12年生まれ。古市出身。大津高校卒業後、日本大学法学部を経て、貿易会社(株)三栄通商設立。

現在、(株)ミツオ役員、百萬石醸造(株)役員として活躍中。家族は、3人の息子さんはそれぞれ独立され、妻と2人暮らし。

※ふるさとへ登場者の推薦をお待ちしています。

